

方法主義

方法主義とは、2000年1月1日の「方法絵画、方法詩、方法音楽(方法主義宣言)」に端を発する芸術運動とその主張のことである。2000-2004年という特定の年代と、中ザワヒデキ、松井茂、足立智美、三輪眞弘という特定の人物に根ざした固有名詞だ。「方法」はもともと普通名詞だが、方法主義においては特定の意味を孕む。方法主義あるいは方法芸術は、モダニズムとポストモダニズム、方法の芸術と芸術の方法との狭間で、可笑しみと内部抗争を伴いつつ展開された。

【1】方法主義第一宣言

後から第一宣言と呼ばれるようになった2000年1月1日の宣言は、美術家中ザワヒデキが起草し、詩人の松井茂と音楽家の足立智美が起草立会として名を連ねたものである。500通以上の年賀状(日本語のみ)と1,000通以上のEメール(日英併記)により、ミレニアム初日に人びとに届けられた。「方法絵画、方法詩、方法音楽(方法主義宣言)」と題することにより、主要な芸術3分野の並置と「方法」という接頭語による命名を行い、良くも悪くも主義であり宣言であることを明示した。

意図は二つあった。一つはフォーマリズムとは異なるモダニズムを打ち立てることで、そうすれば諸芸術は分断されずに連携できる。もう一つは当時全盛のポストモダニズムに異を唱えることで、ストイックな命名はそのためにも必要であった。

20世紀初頭のダダの芸術家たちによる制作の放棄と、未来派の詩人たちによる意味からの離脱と、新ウィーン楽派の音楽家たちによる調性の無視は、別々の事態であるはずがない。還元主義という同じ原理が同時期の美術と詩と音楽に作用し

たとえたいが、20世紀後半には還元主義すなわちモダニズムが、ただちに形式への還元つまりフォーマリズムに結びつくとされていた。形式は素材(メディウム)に依拠するため、素材の異なる芸術同士は分断される。

素材を直接提示するコンクリティシズム(具体美術、具体詩、具体音楽)も同様だ。詩のアイデンティティが文字だとすると、文字が使われている限り視覚詩も音響詩も詩である。だが1997年中ザワが発表した《文字座標型絵画》は、文字が画素として配置されているから絵画であり、《五十音ポリフォニー》は、文字が音符として記譜されているから音楽である。そもそも0と1のコンピューターで絵画も詩も音楽も作られるようになった20世紀末、素材はアイデンティティではない。素材が何であれ、それを扱う方法がジャンルを規定する。

ここから「形式ではなく方法への還元」を導き、「方法」の屹立により素材選択を不問に付せば、還元主義のまま諸芸術を連携できる。これは演劇やオペラなど、形式を持ち寄る総合芸術ではない。

宣言が下敷きとした歴史観では、還元主義の行き着く先は同語反復であり、それが顕わになるのは神権や王権が失墜して平坦化した民主主義体制下(ソクラテスの時代と現代)である。その上で、同語反復という行き詰まりから何でもありへと反転し快樂主義を謳歌した2000年前後のポストモダン状況(村上隆の「スーパーフラット」等)に対し、そうではなく、同語反復の無意味を戒律として甘受すべきとした。つまりは当時嫌われていたモダニズムを敢えて悪役として引き受けた。

【2】方法主義第二宣言

続けて3名は機関誌『方法』を発刊した。ゲスト1名ならびに方法主義者3名のテキストとウェブ作品(URLと作品解説)を所収したEメール配信誌で、ゲストは毎号交代し、ほぼ隔月刊、購読無料で転送自由とした。刊行のたびに新規配信申込があり、同誌刊行は方法主義者グループの活動の主軸となった。

9月2日の週刊『図書新聞』に「方法鼎談2000」が掲載された。添えられていた公式写真(JR車内の喪服姿の3名)を見た『美術手帖』の楠見清は「ハイレッドセンター、あるいはYMO」と看破した(男3人・反芸術・テクノポップ)。12月に刊行された同誌2001年1月号には「方法」鼎談2000→2001」が掲載された。「この1年間は、起草者である中ザワさんの批判はするまいと私は決めていました」という足立の発言から始められていた。

2001年1月1日に年賀状とEメールで発表された「方法主義第二宣言」は、足立が起草し、中ザワと松井が起草立会として名を連ねたものである。反方法主義注釈であると補遺されたが、足立にとっては方法主義注釈だった。第一宣言のとおり同語反復を戒律として甘受すれば、感傷が生じてロマン主義的アイロニーによる自己肯定性(コギト)が発動するが、これはポストモダニズムから当然批判されるべきモダニズムである。そうなることを予め知っていたが、それでも敢えて第一宣言を提出した。これに対し第二宣言では、予め知ってはならない(歴史を忘却せよ)として、「無知の知」的な肯定性の回避を図った。すなわち足立にとって「モダニズムはポストモダニズムよりかはマシ」(第一宣

言)だが、「モダニズムもいやだ」(第二宣言)だったのである。

3月、北九州市立美術館の内外で第一回方法芸術祭が開催され、3名による共作《方法カクテル》の発表等があった。アルコールとノンアルコールを49通りに組み合わせる同作は、絵画でも詩でも音楽でもないインターメディア作品ではない。混色という方法による絵画であり、主語と述語による詩であり、和声法による音楽であるという方法芸術作品である。

この頃までに中ザワは《質量》《金額》ほかの方法絵画シリーズや《方法舞踊》を展開し、松井は継続型の方法詩《純粹詩》や、方法芸術も扱うプロジェクト「BG(MorP)?」を始動した。足立は2001年12月31日の機関誌第12号刊行をもって方法主義者グループから離脱した。

【3】方法主義第三宣言

第二宣言は、ポストモダニズムを否定した結果のモダニズム(第一宣言)を否定した結果のポストモダニズムである。ゆえに第一宣言は、第二宣言に対して提出された。これが第三宣言だ。2002年1月1日に年賀状とEメールで発表された「方法絵画、方法詩、方法音楽(方法主義第三宣言)」は、松井と中ザワが起草し、作曲家の三輪眞弘が起草立会として名を連ねたものである。以降の方法主義者は、この3名である。

4月、阿佐ヶ谷ギャラリー倉庫で第二回方法芸術祭が開催され、3名による共作《方法ばぬき》の発表等があった。三輪は《あたりさまあるいは、8人のプレーヤーによるXORアンサ

ンブル》を發表し、これは「逆シミュレーション音楽」の第一作となった。

日本語で刊行されていた機関誌は第13号から英語化されたが、2003年1月1日には新たな宣言は行わず、第18号を新フォーマットで刊行した(月刊化・ゲスト廃止・軽量化・日本語併記)。また、イラク戦争に反応して第21号に「方法主義参戦宣言」を掲載する等、特別仕様号もあった。この間、中ザワはニューヨーク各所で「METHOD NIGHT」を開催し、松井はうらわ美術館で「方法詩について」を展開、Eメールマガジン「5日毎日発表」を刊行して《量子詩》を開始した。

ところで「方法の芸術」は「方法についての芸術」であり、方法が目的化されている(方法に芸術が重ね合わされる:方法は規則ではない)。一方、「方法を用いた芸術」では芸術が目的で、方法は「芸術の方法」だ(方法と芸術は別物である:方法は規則である)。方法芸術は前者であり、後者のルールベースドアートではない。ところが方法の芸術への芸術の方法の混入は避けがたく、規則から音響や来歴を逆シミュレートする三輪作品で特にそれが顕著だった。

あるいは、三輪にとっての方法芸術は初めから後者だったとすれば、音楽の方法には演奏法が含まれ、その射程は奏者の身体改造にまで及ぶ。三輪の発案により2004年春、新たな肉体によって方法主義的な芸術作品を実現する人間の集団「方法マシン」が、方法主義者グループとは別団体として結成された。

10月の神奈川県民ホールでの「演算するからだ展」が、方法マシンの最初の出番だった。だがこのための準備の最中、(絵画、詩、音楽を)「方法マシンは自らの身体生理の必然において解釈し身体運動に変換する」という趣意書の文言が、三

輪以外のすべての方法芸術作品にとって、不要どころか有害であることが判明した。そもそも方法主義は作曲の立場にとどまるべきで、解釈や演奏に立ち入ってはいけなかった。同様に、頭脳だけの立場で、身体に立ち入ってはいけなかった。

方法主義者グループは、方法マシン設立時に召還した足立の寄稿も含めた2004年12月31日の機関誌第42号を最終号として、同日、活動を終止した。

その後、方法マシンは2009年まで活動を続け、三輪が牽引した手順派の動きもあった。中ザワは、同語反復から外れていった方法主義を批判的に継承する「新・方法」(2010-12:平間貴大、馬場省吾、中ザワヒデキ/2012-19:平間、馬場、皆藤将)に関わった。2023年、勤務先を三輪や松井と同じくする大久保美紀のディレクションにより、岐阜県美術館にて「IAMAS ARTIST FILE #09 方法主義芸術:規則・解釈・(反)身体」、IAMASにて「岐阜おおがきビエンナーレ 2023〈方法/Method〉」が開催された。前者は「規則・解釈・身体」または「規則・解釈・身体の在処」と副題する予定だったが、これに危機感を覚えた中ザワによる妥協案が採択された。[2024年1月記]

中ザワヒデキ(美術家)

Methodicism

Methodicism, an art movement characterized by its distinctive assertions, originated from "Method Painting, Method Poem, Method Music (Methodicist Manifesto)" dated January 1, 2000, and was rooted in the specific period of 2000 to 2004, involving individuals such as Hideki Nakazawa (artist), Shigeru Matsui (poet), Tomomi Adachi (musician), and Masahiro Miwa (composer). Methodicism, or Method Art, evolved between Modernism and Postmodernism, and between art of method and method of art, accompanied by a blend of humor and intergroup strife.

【1】 First Methodicist Manifesto

The manifesto, dated January 1, 2000, was drafted by Nakazawa and witnessed by Matsui and Adachi. There were two intentions. One was to establish another Modernism, distinct from Formalism, by adopting a reduction to method instead of form disregarding the medium, thereby enabling various art forms to link. This is not an integrated art that gathers various forms. The other was to voice opposition to the then-prevailing Postmodernism, embracing the tautology not as an excuse for hedonism but as a discipline, which meant to play the heel role of the then-hated Modernist.

【2】 Second Methodicist Manifesto

The trio launched the email bulletin "Method." Along with holding "Method Art Festival" as well as individual producing Method Art, this publication became central to the Methodicist group's activities. The "Second Methodicist Manifesto," dated January 1, 2001, was drafted by Adachi and witnessed by Nakazawa and Matsui. It was itself "Anti-Methodicism Notes." For Adachi, Modernism was better than Postmodernism, but he still disliked Modernism. He left the group on December 31, 2001.

【3】 Third Methodicist Manifesto

The Second Manifesto was a Postmodernism arose from rejecting Modernism arose from rejecting Postmodernism. This was the Third Manifesto. "Method Painting, Method Poem, Method Music (Third Methodicist Manifesto)," dated January 1, 2002, was drafted by Matsui and Nakazawa, and witnessed by Miwa. Now, "art of method" is "art about method," in which the method becomes an objective. (Method is not a rule.) In "art employing method," art is an objective, and the method is "method of art." (Method is a rule.) Method Art is the former, not the latter Rule-Based Art. However, the infiltration of method of art into art of method is inevitable. In the spring of 2004, prompted by Miwa, a group "The Method Machine" was formed to realize Method Art through its own interpretations and new physicalities. However, it became clear that Methodicism should have remained in the realm of composition, avoiding interpretation and performance. Also, should have stayed cerebral, not delving into the body. The Methodicist group concluded its activities on December 31, 2004.

The Method Machine continued until 2009. Nakazawa was involved in the early days of "New-Method" (2010-2019). In 2023, "IAMAS ARTIST FILE #09 Methodicist Art: Rules, Interpretations and Body in Question" was held. "In Question," referring to the subtitle, was added by Nakazawa as a compromise proposal. [January 2024]

Hideki Nakazawa (Artist)